

2006年6月11日 聖霊降臨節第2主日礼拝

『聖霊が告げること』

(ヨシュア 23 章 6~8、同 14~16、使徒言行録 20 章 17~27)

パウロは、アジア州のエフェソの町に約二年の間滞在し、講堂などを借りて主イエスのことを宣べ伝えて来ました。その結果エフェソを中心にアジアに住む多くの人々が主の言葉を聞くこととなります(使徒 19 章 10)。その結果、エフェソの教会が建てられました。ところが、エフェソの町でこの信仰をめぐって騒動が起こりました。パウロは、エフェソの町を出ることになったのです。パウロは、マケドニア州やギリシャへ行き巡りミレトスに来ました。パウロは、ミレトスからエフェソに人をやって、長老達を呼び寄せました。長老達は、エフェソからミレトスへおよそ 50 キロの道のりをパウロに会いにやって来ました。パウロは、長老達に言いました。アジア州にパウロがやって来た最初の日から、どのように過して来たのか。特にパウロが、どのように主イエスの事を伝えて来たのか。その事をあなたがたはよく知っているでしょうとパウロは言います。エフェソの町にも、他の多くの町と同様に偶像が数多く立てられていました。エフェソの兄弟たちも、教会かつて他の人達と同じように偶像を拜んでいました。本当の神を知らず、人間の手で造った神々、自分たちの都合のいいように造った神々を祭りあげ、自分たちの欲望のままに生きてきました(エフェソ 2 章 3)。エフェソの人達は、パウロを通して主イエスの福音を聞き、悔い改めて、唯一のまことの神を信じるようになったのです。

19 節:「自分を全く取るに足りないものと思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました」。パウロは、自分のことを決して誇ることはありません。自分を取るに足りないものと思い、聖霊の導きに従って異教の地に出て行きました。聖霊の導きに従って、マケドニア州へ向け、その後アジア州のエフェソの地にもやって来たのです。パウロの伝道には何時も試練がついて来ました。パウロの語る福音を聞いて信じるも現れます。その一方で、反対する人たちも出てきました。ユダヤ人の中にも異邦人の中にも反対する人はいました。特にパウロは同じユダヤ人達に度々反対され苦しめられて来ました。同胞に反対されたり憎まれたりする事は実際に辛いことだと思います。今、サッカーのワールドカップのことで連日テレビで報道されています。日本人は日本代表をを応援する。ブラジル人はブラジルを。ドイツ人はドイツを。それが自然だと思います。日本人が、広く世界で活躍する。それを素直に応援したいと思っています。しかし、パウロの場合これとは反対のことが起こりました。パウロが、キリストを伝えた時、同胞のユダヤ人達が、誰よりも執拗にパウロの妨害をしたのです。ある町でパウロに反対したユダヤ人達が、別の町で伝道するパウロを追いかけて来てして邪魔をしたということが何度もあったのです。イエス様が、御自分の民の所に来られたのに拒絶されたように。パウロもまた同じ神の民から拒絶されたのです。これは、キリストの故の拒絶でした。それでも、パウロは決してひるむことなく福音を伝

え続けました。パウロは言います。20 節「役に立つことは、一つ残らず、公衆の面前でも、方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてもきました」。役に立つことというわたしたちはすぐに役立つ生活の智恵のような事を考えます。パウロは、そのようなことを教えたのではありません。もっと大切なことを教えたのです。21 節「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とをユダヤ人にもギリシャ人にも力強く証して来たのです」それを聞いた人々が、永遠の命を得るために、パウロは熱心に伝えてきました。ユダヤ人であろうとギリシャ人であろうと、幼い子どもであろうと年を重ねた人であろうと、本当に大切なことはひとつです。神の前で悔い改めて、主イエスを信じること、イエスを主と信じて罪を赦して頂くこと。それがなければ、永遠の救いはあり得ません。そこには何の分け隔てもありません。主イエスを信じること、それこそが本当にわたしたちのためになることです。

22 節：そして、今わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。パウロは、これから聖霊の導きに従ってそこに行くのだと語りました。エルサレムで、何が待っているのか。それはパウロにもまだはっきりした事はわかりません。エルサレムに行けば牢獄の鎖と苦しみが待っています。それだけは、聖霊がどこの町にいても、パウロにはっきりと告げてくださっている。

24 節：「しかし、自分の決められた道を走り通し、また主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証するという任務を果すことができさえすれば、この命さえ惜しいとは思いません」。何時でも聖霊によって、導かれ伝道続けてきたパウロでした。パウロの最初の伝道の旅も聖霊の導きによって始められました。アンティオキアの教会で主を礼拝しているとき聖霊が告げました。「さあバルナバとパウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事にあたらせるために」(使徒 13 章 2)。第二伝道旅行を始めるに時もパウロは最初の計画を変更して、主の霊が示されたマケドニアへ出かけて行ってそこで主イエスを伝えました(使徒 16 章 6-10)。最後の道のりも聖霊がパウロに示していたのです。エルサレムに行ってローマに行くようにと(19 章 21)。パウロは、始めから終わりまで聖霊の導きに従って自分の道を走り通して行く、その意志をエフェソの長老達に伝えました。主の恵みの導きによって伝道者パウロはスタートしました。伝道者として最後まで恵みによって走り通して行こうという。聖霊によって与えられた道を右にも左にもそれることなく進むこと。それが、恵みから恵みに至る道です。パウロの辿った道のりは、十字架の道を走り通された主イエスの後に従う道であります。異邦人の使徒として、パウロは、エルサレムからローマに向かう事を示されました。今まで、まことの神の事など聞いたこともない人が、神の恵みの福音を伝え聞くことができるように。キリストの言葉を聞いてまことの神を信じるようになるために。この務めは、神の恵みによってパウロに与えられました。2 パウロは教会の将来のために一つ長老達もこのことを告げました。「そして今、あなたがたは皆もう二度とわたしの顔を見る事がないと分かっています。

わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。だから、特に今日はっきり言います。誰の血についてもわたしには責任がありません。これは、パウロが、かつて教会の迫害者として、ステファノの死刑に賛成したことクリスチャン達を捕まえたことについて言っているのではありません。そのことで責任逃れをしよう等とパウロは考えていませんでした。もし、誰かがイエス・キリストの教え離れて永遠の命を失ったとしても何の責任もない。パウロは忠実に福音を伝えてきた。言うべき事はいったのだからという意味です。

27節「わたしは神の計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです」神について、救いについて、あなたがたに何一つ包み隠さず伝えてきました。キリストの証人として忠実に。主イエスの他には救いはないということを。一貫してパウロは伝えました。パウロは、主の証人として神のご計画を伝えた。後は、それを聞いた人達の責任です。永遠の命の言葉を聞いても信じなかった人たち。それは、他の誰かのせいにはできません。キリストの言葉を聞いて、それを信じてわたしたちは永遠の命を約束されたのです。一度福音を信じたのに、キリストから離れたなら、その先には滅びがまっています。「神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせる事はできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです」(ヘブライ6章5-6節)

この後も、パウロは主の備えた道を走り通して行くことになります。その力はどこから来ていたのでしょうか。この力は、パウロ自身の力ではありません。それは、かつて神の教会を迫害した自分の様な者のために主イエスが執り成し祈ってくださった。この事実をパウロは確信していたからです。主の恵みによって今がある。自分の様な者に、主が尊い使命を与えてくださっている。そのことを知っていたからです。主イエスのために苦しむことも、それ自体恵みとして与えられた道です。主によって罪を赦された者としてパウロは、自分たちを迫害する者のためにも祈りました。わたしたちもパウロの様に主の恵みによって与えられた道を走り抜いて行きたいと思います。 [説教者：堀地敦子牧師]